

## 第IV章 海の人材育成と 海事文化の振興

現在、海事産業においては、次世代を担う人材の確保と育成が大きな課題となっています。このような中、市内にはわが国初の造船技能学校として因島技術センターが設立され、造船技術者の育成に取り組んでいます。また、船員養成を使命として設立された尾道海技学院は、船員や海洋レジャーに関わる人材育成を行うとともに、海の安全教育を展開しています。

一方で、市内各地には、海や港に関わりのある歴史的な施設や景観が残されています。尾道を代表する祭りも、海や港とともに発展してきた歴史の中から生まれています。こうした海事文化は、尾道の特徴とも言えるもので、これらは海事都市としての尾道市が海運業や造船業などの海事産業の単純な集積ということではなく、特色ある「海のまち尾道」であることのゆえんとなっています。

### ●造船業を担う人づくり

#### ◆我が国初の造船技能学校の設立

##### ～因島技術センター

近年、産業構造の変化が進む中で、「ものづくり」に不可欠な基盤的技術の衰退が懸念され、また、技能者も高齢化に伴って、技能の継承が危惧される状況が続くようになりました。尾道地域の造船業界ではこうした課題に早くから着目し、1999年4月、日本で初めて造船事業者による「民間の知恵を生かした低コストで効率的な造船技能学校」として「因島技術センター」を開設しました。

同センターは、尾道地域の造船会社から現場をそのまま借り受けて研修施設とし、旧日立造船を中心としたOB技能者などが研修講師となっています。基礎的な技能から高度で特殊な技能まで、幅広く習得するための教育を共同化し、有能な人材を育成する取り組みが官民一体となって続けられています。

研修内容は期間1～2週間の専門技能研修と期間3か月の初任者研修からなり、受講者は主に尾道地域の造船技能者ですが、専門技能研修には全国各地の造船所から参加があり、瀬戸内海地域を中心に我が国の造船技能の伝承に大きく貢献しています。

このように技能伝承のシステム化ができたことで、新人でも3か月で一通りの技術を身につけ、溶接、ガス切断、クレーンの資格等も取得できるようになり、それま

で技能伝承に時間的な困難があったり、指導者の確保などで苦勞してきた造船所から高い評価を受けました。

こうした因島の取り組みは「人材育成の因島モデル」として国からも注目され、因島のケースをモデルとして、全国各地で造船技術センターの設立が進められました。今では横浜、今治、大分、長崎、相生にもこうした技術センターが作られています。

### Column

#### ぎょう鉄研修の風景

2009年の秋晴れの日に、㈱三和ドックを会場として、ぎょう鉄（鋼板を曲面に加工する技術）の中級専門技能研修カリキュラムが行われていました。鞍型板加工の実技試験の会場には、平らな鉄の厚板が10枚ばかり置かれ、板ごとに2～3人の研修生が割り当てられ、曲げ加工に取り組みました。講師は高温のガスバーナーを危険なく使う方法を指導するとともに、火の強弱や鉄板を焼き付ける時間間隔について、自らの経験を交えて指導しました。受講者の年齢層は20歳代前半から中高年までさまざまでしたが、皆新たな技能を習得する意欲は高く、回数を重ねることで自分の技術が上達していくことに喜びを感じていました。また、講師も短時間の指導で受講者に成長が見られるようになっていくことに達成感を感じていました。こうして伝承された技能は、今後尾道地域を始めとして、全国から訪れた受講者が各自の造船所に戻って発揮され、日本の造船技術を維持発展させていく原動力になるのです。



中級専門技能研修（ぎょう鉄）

### Voice

#### 因島技術センターの立ち上げ

「造船技能者のいびつな年齢構成と後継者育成に危機感を持っていた因島地域の造船事業者の熱意が、当センターを作ったと言える。また造船所OBの指導員の皆さんの、地域や後輩のためという熱い指導ぶりには頭が下がる。」

㈱三和ドック 寺西社長

#### 研修講師のやりがい

「教える際は、若い世代には語彙に限りがあり、理解力に制限があるので、現物を見せてはつきりと目で確かめさせるようにしている。研修生の中には短時間の中で日々上達していくのが見える人と、なかなか見えない人がいるものの、全体として上達したことが見えてくるようになるのが、指導者としてのやりがいである。」

講師（51歳、㈱三和ドック）

